

専修大学
創立130年
記念企画
第09回

日本を変える、
世界を動かす！

社会知性の チカラ

The Potentiality for "Socio-Intelligence"

日本を元気にする 女性ののしなやかな活躍

女性の自立と社会進出

一三〇年の専修大学の歴史のなかでも、近年、特に際立つのがOGの活躍。語学力やコミュニケーション能力、さらには芸術や企業運営、法律や心理学といった専門知識を生かして各界をリードする一〇人の女性たちの活動を紹介する。

環境問題を食い物にするのではなく、
ビジネスにしなければならぬ

一九七〇年代の後半、短大を卒業後、専大文学部に編入学しました。二年への編入だったので、三年間、専門課程を学ぶことができて幸運でした。人文学科の心理学専攻（現・心理学科）でしたが、志望の動機は高校時代に読んだ「異常心理学への招待」という新聞記事が印象に残っており、自分のことをもっと知りたいと思ったからです。

大学の意義は、人と一緒に学べることを考え、三年間しかない時間をムダにしないためにも、すべての講義を最前列で聴きました。今でも記憶に残るのは、認知心理学の高橋滯子先生の講義。「見えているものは本当

か？」というのが先生の命題で、私たちはただ視覚だけでなく、「心の眼」で物事を見ていること、だから痛みを感じる心の知覚神経をなくすといけない、ということを教わりました。

もともと悪かった目の病気が、激務のなか再発、過労とも相まって二〇代後半には「仕事を辞めない」とあと三年で失明」と医師から宣告されました。健康でないと仕事はできないと気づき、健康でいるために必要なことを模索するうち、次第に水、空気、食物、土、栄養といったことに興味が向いていったのです。そして、自分に健康的な生活は、地球環境にもすべてよいということがわかり、生活改善をして病氣も完治しました。

「心の知覚神経」を、環境に対しても持つべきと思います。公害とは異なり、環境問題はすべての人が加害者であり被害者であり、さらに解決者でもあることを、私たちは認識すべきです。そして、環境問題を食い物にするのではなく、食い扶持（ビジネス）にしていかなければならないと思うのです。

メディアでの活動、発病
そして環境問題への目覚め

卒業後は、文化放送のアナウンサーとなり、フリーで日本テレビにも出演するなど、メディア人として激務の毎日でした。

人はすべてルールのなかで生きています。「これだけは」という越えてはならない一線がある。それを越えてしまったのがかつてのバブル経済であり、現在の環境問題ではないでしょうか。高橋先生がおっしゃっていた

環境ジャーナリスト
村田佳壽子

（1981年文学部卒業）
東京都出身。
83年、文化放送の専属アナウンサーからテレビへと活動の場を広げる。
89年、環境ジャーナリストの活動開始。
91年、故筑紫哲也、立花隆両氏らとともに日本環境ジャーナリストの会設立。現在副会長。
93年、環境庁国立環境研究所客員研究員。
99年、上越市環境担当副市長。
現在、東京農工大学非常勤講師。
ワールドウォッチ研究所日本副代表。

物事には「原因」と
「結果」が必ずあると
教えてくれた専大の講義

自然健康・治癒学博士、
日本ナチュラル・ハイジーン普及協会会長

松田麻美子（1971年文学部卒業）

東京都出身。卒業後、92年「アメリカ健康科学カレッジ」で栄養科学を学び、02年『常識破りの超健康革命』（グスコ出版）を執筆・出版。06年「ナチュラル・ヘルス大学」で自然健康・治癒学の最高学位を取得。米国在住。

幼

い頃から小学校の図書館の本をすべて読んでしまふほどの本の虫で、専大の国文学科へは特待生で入学しました。夢中になった講義は、国文学とは関係のない「喫煙と肺がん」という生物学の講義。タバコや人工着色料が健康に及ぼす影響など、「物事には必ず「原因」と「結果」がある」という話は興味深く、印象的でした。そのときはまだ、健康に携わる仕事に就くなど、思いもよりませんでした。しかし、卒業後、美術館での仕事を通し、英語を学びたいと感じ、渡米した際に、

不健康な食生活の結果、子宮筋腫を患ってしまったのです。そこで自身の健康管理に真剣に向き合うこととなり、一念発起。猛勉強の末、栄養科学の最高学位を取得しました。今は、自然健康法に基づく健康学である「ナチュラル・ハイジーン」を広める活動を行なっています。文学志望から健康志向へ。人生のテーマはアンテナさえ広げておけば、ふとしたところから見つかるものです。在学生の皆さんも、きっかけはなんでもいいので、自分なりのライフワークを見つけてください。

地方政治に
企業経営、
研究&臨床と
芸術……
—人と人をつなぐ

画家
檜原和子

（1966年法学部卒業）

山口県出身。国際現代美術協会会員。第28回「i・m・a展」でパリの朝もやをモチーフにした「AUTOMNE」で文部科学大臣奨励賞を受賞。同作品は生田10号館4階に飾られている。

仕事柄、旅が好きです。08年秋にタシケントの日本人墓地を訪れたところ、抑留日本人の物語者を用う記念碑があり、見ると専大の佐竹弘靖ゼミが建立に協力したとのこと。現地では写真家で専大OBの萩野谷慶記さんとも偶然会い、専大の歴史と人脈の深さを異国で実感しました。

大田区議会議員
森愛

（2000年経済学部卒業）

神奈川県出身。卒業後、ナレーター・レポーターを経て、民主党の岩間哲人衆議員秘書に。07年、東京都大田区議選で29歳という最年少で初当選。「民主党大学東京」副事務局長も兼任。

室井義雄ゼミでは、世界の多様性を研究し「真の豊かさとは何か」を考えました。今は、区民の方との触れ合いを通し、汗して働く人が報われる世界でなければ、持続可能な社会環境は育たないと強く感じています。一人ひとりが輝ける区にするため、尽力していきます。

銀行論、金融論で教わった
モノ・おカネよりも
人と人とのつながり

三井住友銀行、課長
佐藤優子

（1997年商学部卒業）
神奈川県出身。98年、住友銀行に新総合職として入行。CS（コンシューマー・サービス）部門を中心に務める。08年3月には、専大の卒業式・学位記授与式で、卒業10年目の校友代表として祝辞を贈った。夫も専大OB。

在

学中、ゼミや先輩にはとにかく恵まれました。十合既ゼミでは、日本の商習慣をさまざまな角度から学びました。新潟の郊外型専門モールを視察して、店舗の特徴や集客員合を調査したことが印象に残っています。また銀行論や金融論の講義では、モノ・カネよりも、人と人とのつながりが大切だということを学び、現在の仕事に生かされています。

成長できる職種がよい」と考え、住友銀行（当時）に入行しました。入行二年目くらいには証券外務員の資格も取得、個人のお客様相手のリテール業務でも幅が広がり、強みとなりました。入行時はまだ女性の管理職が少なかったのですが、社の先輩が頑張ってきたことで、現在は私のような立場の女性も増えてきました。

カウンセラー
吉田美智子

（1989年文学部卒業）

静岡県出身。在学中、アメリカのサスケハナ大学に交換留学。卒業後は外資系企業でマーケティングとして活躍。その後、東洋英和女学院大学大学院にて臨床心理学を修める。

広い世界を見てみたかった大学時代。2年の夏休みに単身渡米、3年のときに交換留学プログラムで留学しましたが、それは先生方や友人の支援あってのことでした。海外出張の多かった20～30代を経て、42歳の今はカウンセラーとして、無限の心の世界を探訪しています。

専修大学人文科学研究所特別研究員
押山美知子

（2006年文学研究科博士後期課程修了）

神奈川県出身。柘植光彦研究室所属。修了後も専大人文科学研究所特別研究員として、少女マンガのジェンダー分析を行なう。著書『少女マンガジェンダー表象論』で第3回女性史学賞受賞。

柘植研究室は、大学院生がそれぞれの研究テーマを超え、自由に議論を交わすことで自身の研究を深めていくことのできる非常に刺激的な場でした。議論を通して、「自分で枠を決めない」「関係ないと思うことでも興味を持ってみる」ことを学び、今の研究にも生かされています。

ライフセーバー
中曽根麻世

（2005年経営学部卒業）

千葉県出身。卒業後、05年から全日本ライフセービング選手権オーシャンウーマンレース4連覇。日本代表として、世界選手権に2度出場。数々の国際大会に日本代表として参加、活躍中。

サーフライフセービング愛好会で出合った、ライフセービング競技は、人命救助を想定したレース。救助技術を磨くため、仲間たちと協力し、目標達成のための努力を惜しまず取り組んできました。真剣に向き合ってきたからこそ、今も、心からこの競技を楽しめるのだと感じています。